

す。その原因として、植付初期の土壤乾燥、そのような状態への急な低温、あるいはその乾燥状態への遅れた多量の灌水が引きがねとなっている。この裂開がひどくなると、単なるワレではなく、扁平芋となってしまうこともある。この対策としては、植付け当初からの安定した土壤水分管理が必要です。従って、労力はかかりますが、植付前日には十分灌水することから始めます。特にピクリン処理を行った圃場では、土壤が乾燥しているので必ず灌水が必要となります。

植付け後25～35日頃は根が芋として分化する時期で、この時の急な、しかも、多量の灌水はワレの発生を助長するので特に注意します。芋の発根には地温が17～18℃必要で、一重マルチ栽培では無理な早植えは品質、収量を低下させる。早植えする場合は労力配分も考え、また、地温の確保できる二重トンネル

栽培、大型トンネル栽培とする。

5 最近の動き 本県の早掘甘しょは、主要品目として高い販売実績をあげているものの、近年、ウィルス病による帯状粗皮症いもの多発によって、品質及び収量の低下を招いている。この症状が生じた場合、価格は半値以下となり、生産農家にとっては、深刻な問題となっている。

このため、ウィルスに感染していないフリー苗を使った栽培方法の導入の声が高まってきた。本県としては、63年度、種苗セクターに県単事業で増殖施設の整備を、また、産地農協については、国の「いも類優良種苗安定確保事業」により共同種苗増殖施設の設置を予定しており、高品質いもの生産に向けて強力な取り組みを行うこととしている。

＜筆者略歴＞ 昭和19年生まれ。昭和42年兵庫農科大学（現神戸大農学部）卒。同年県採用。普及所農業技術課等勤務、昭和58年より園芸蚕糸課。

『ジャガイモと映画』

ジャガイモは、人種問題というアメリカの病巣をえぐりつつ、親と子のつながりを描いた映画のタイトル『ワンポテト、ツウポテト（わかれ道）』になったが、私にとってとくに印象に残っているのは、『大脱走』と『旅情』の二つである。

『大脱走』は、ご存知スティーブ・マックイーンやチャールス・ブロンソンも出ている。第二次世界大戦下、ナチス・ドイツ軍が脱走癖のある空軍将校ばかりを集めて絶対に逃げられないという第三捕虜収容所をスイスの近くにつくり、厳重な監視のもとにおく。ここで番兵と捕虜との知恵比べが始まり、連合軍側はトムと名づけた地下トンネルを掘り、一度に250名の脱走を計画する。

脱走計画が仕上げに近ずいたときのこと、スティーブ・マックイーンが大量のジャガイモを手に入れてくる。何のためかといふかる兵士達を前に、彼はその皮を剥ぎ、あるものをつくる準備にかかる。ついに、7月4日の朝がくる。星条旗を掲げ、兵士達をたたき起こし、アメリカ独立記念日を祝おうとする。ジャガイモで秘かにつくって

いたのは蒸留酒であった。兵士達は暫くぶりにアルコールにありつき、二重の喜びを分かちあう。しかしこの日トムがバレル。これで屈する彼らではない。その後再び計画が練られる。その結末のほどは……。

もう一つは、1955年の『旅情』というイギリス映画。ジェーン（キャサリン・ヘプバーン）は、長い秘書生活で青春をすりへらし、やっとヨーロッパ見物の夢を実現し、ベニスまでやってきた。女の一人旅は、始めのうちは見るものすべてが珍しかったが、やがて孤独感にさいなまれる日々が続く。そんな彼女の前に骨董品店の主人レナード（ロッサノ・ブラッツィ）が現れる。彼と親しくなるのだが、妻がいることが判って、やけ酒を飲むシーンがある。この時のつまみは、ポテト・チップスであった。

イギリスでは、チップスをクリスプと呼んでいるが、これには「社快で、パリッとする」の意味がある。チップスを食べたジェーンが、これでスカットしたかどうか。

（北海道立中央農業試験場 主任研究員 浅間和夫）